

第三百十四回 青葉会

平成二十四年五月二十四日(木) 午後六時〜九時

丸紅来客食堂「談話室」

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生

〈出席者〉 伊賀山そらお 今井紀久男 小川恭延 小西弘子 朱牟田恵洲 土谷堂哉 豊田ゆたか

山崎亜也 山内天牛

石川清 大林猛 柿崎忠彦 久米五郎太 小早健介 中野一灯 福島正明 古田昇

南平和夫 宮内規雄 渡邊盛雄

赤田堅 庄司龍平 橋口隆 早川允章 福島正明 村田くに子 山崎青史 山本三恵

〈紙上選句〉

《選者吟》

午(こ)の鐘を打つ羅(うすもの)の僧若し

(恵…古典の味わい) (深大寺…韓国系)

万里子 (恭・弘・恵・堂・ゆ・く・天

・三)

五月晴れ迷子札付け児ら燥(はしき)ぎ

全 (紀・龍)

街灯の下へ木戸出る墓(ひきがえる)

全 (恭・龍)

分蜂のホバリング散り竜巻来(く)

全 (弘)

雀らへ煙るかに降る松花粉

全

《互選句》

七点 ☆ 妻呼ぶは空耳なりし昼寝覚め

恵洲 (万・そ・弘・龍・堂・允・亜)

六点 ☆ 背筋伸ぶ古希の祝の夏帽子

堂哉 (万・そ・恵・龍・ゆ・允)

五点 ☆ 麦の秋今年限りの夫婦(めおと)農

全 (そ・恭・恵・ゆ・三)

(☆上五↓麦秋や)

しがらみを脱ぎ捨てると更衣

昇 (堂・ゆ・正・く・天)

(正↓「しがらみを脱ぎ捨てられず来る更衣(こうい)」では?)

メーデーやパン屋のおやぢパンを切る

天牛 (弘・恵・亜・青・三)

(青…お祭り騒ぎをよそに只管パンを切っているおやじの顔が見えます)

万緑の気流に乗りて鷹の舞ふ

そらお (堅・隆・允・亜)

南三陸町防災対策庁舎

☆ 残骸のビル天辺に夏雲雀

紀久男 (万・堅・隆・允)

若葉風春画に照れる若女将

全 (堂・隆・正・亜)

(正↓「風薫る春画を横目で若女将」若を一つ略す)

☆ 松籟の音静まりし初夏の茶席(せき)

五郎太 (万・恭・弘・ゆ)

(☆…茶事の方が風情あり)

大き瞳の大き未来や五月の子

健介 (允・く・青・天)

☆ 岩走る瀬と光り合ふ山桜

一灯 (万・そ・恭・ゆ)

実像と虚像の隙間(すきま)サングラス

正明 (ゆ・隆・く・天)

青嵐誰かシヨパンを弾いてゐる

そらお (恵・允・天)

風光る笑顔絶やさぬフラガール

忠彦 (隆・亜・青)

(青…一度は行ってみたい所です)

青根温泉(蔵王山麓) 不忘閣

二点

☆ 老鶯(らふあひ)や蔵に廣々大名湯(だいまやうゆ)

紀久男 (万・三)

☆ 金婚式緑と子等に包まるる

恭延 (万・く)

散りてなほ香を葉に残し桜餅

忠彦 (堅・堂)

辻々に御輿を送る田原町

弘子 (そ・正)

ひよつとこの笑はずに舞ふ祭笛

全 (そ・天)

初夏の空へふはりとシート干す

全 (恵・亜)

朱鷺は今雛を育くむ五月哉

惠洲 (紀・天)

(本能寺の変の前夜、連歌師紹巴を愛宕山に招き歌仙を巻いた光秀が詠んだ発句)

「時は今天(あめ)が下(した)知る阜月かな」を踏まえている

石垣の堅き古城址花菖蒲

ゆたか (恭・青)

(青：固い石と爛やかな花菖蒲の取り合わせがいい)

夕映えのスカイツリーやどぜう鍋

全 (正・青)

(青：「の」↓「や」。「や」↓「と」)(正：田原町の飯田屋?)

☆水中花上つて仕舞ったバレリーナ

正明 (万・紀)

露伴翁もたまげる塔や五月雨るる

天牛 (紀・三)

為せば成る小枝に跳び付く雨蛙

盛雄 (紀・隆)

花散るもなお青葉良き桜かな

そらお (堅)

龍井(ろんじん)の村のにぎわい新茶祭

全 (紀)

若葉映ゆ暫し佇む道すがら

清 (堅)

三社祭の当日、勘三郎の「め組の喧嘩」

☆喧嘩場に神輿繰出し客やんや

紀久男 (万)

緑映(は)え貝を育(はぐ)む志摩の海

猛 (紀)

風薫る伊勢内宮や森殿(しんげん)に

全 (く)

雷鳴と爆音頻り基地想ふ

恭延 (正)

(正：下五↓「濡るる基地」では如何)

老鶯の声に遅らす散歩かな

全 (隆)

加茂川に投網(とあみ)の釣果風薫る

五郎太 (紀)

潔く落ち尽したり柿の花

弘子 (堅)

新緑に酔ひて溺れて生還す

健介 (紀)

薫風の如く田園シンフォニー

恵洲 (く)

老いて老いず冷酒蚕豆初鯉

全 (弘)

☆パセリ植う母より継ぎし小さき庭

堂哉 (万)

☆ありなしの沢風に揺る二輪草

一灯 (万)

(☆：揺る↓揺るる)

江の島の浜茶屋工事夏近し

和夫 (紀)

矢車草剪るや亡妻思ひつつ

規雄 (青)

(青：中七↓「剪る亡妻」)

うすうすとちようちよのごとくスイートピー

全 (堂)

塩鯉喰ひたき一心人誘ふ

巫也 (正)

(正：今年から作っています)(土佐名物)

遊心もあくがれ出でて夏に入る

全 (龍)

五月来て日にちが薬妻厨

天牛 (紀)

●次回青葉会

六月二十八日(木) 午後六時〜九時

(丸紅 談話室)

▲当季雑詠各自五句。投句は二句

七月二十六日(木) 談話室

八月三十日(木) 全

以上 文責 紀久男

平成二十四年五月句会報

一 今回は久しぶりの堂哉さん始め10名出席。投句は五郎太さん（五年ぶりのパリ）ら11名。亜也さんの披講と合評の司会で順調に推移。大阪で腕を上げておられる堂哉さんが高得点三句。恵洲さん、天牛さんも好成績でした。

先生の「とうふ野菜ドーナツ」（吉祥寺）と煎餅、弘子さんの「つばらつばら」（鶴屋吉信のどら焼き）、堂哉さんの神戸土産のおつまみ、恵洲さんの「船中八策」（司牡丹の純米辛口）、亜也さんの「加茂錦・微濾過酒」（大吟醸・新潟）、小生の仙台土産「蔵の華」（一ノ蔵の純米吟醸）と南三陸町のおつまみ・・・と盛り沢山の寄贈あり。話題も豊富で盛会となりました。

「当日の話題」①穀物メジャー買収の快挙②伊藤忠の特別ボーナスの支給③恭延さん金婚式④規雄さん無事退院（何度目かの腸閉塞）⑤南三陸町瞥見（まっけごと）とOBボランテニア等々。

二 関係者近詠

「倍音」30句の内、当季の句のみ抄出

老鶯の讚美歌と和し墓前祭	万里子	ゆるやかに白雲流れ桐の花	允章
気仙語の聖書誦みつつ明易し	全	古井戸の蓋に散りたる花石榴	全
下闇や再び神を試すまじ	全	濃き匂ひ空より降りて朴の花	全
蛙鳴くアルハンブラの薄暑かな	全	閑越えて今みちのくの瀧桜	青史
雛罌粟と羊の群へ雲低し	全	花屑躑（にじ）る今生の悔い躑ること	全
麦秋やドン・キホーテの迹遙か	全	旅疲れ素足になりし時どつと	全
ゲルニカの端に五指曲げ夏至陰る	全	雲遅き皐月の夜の川辺かな	五郎太
涼風の迷路懐かし古都トレド	全	五月闇灯をともしをり渡月橋	全
思い切り異言を交はし涼新た	全	池の端遠きに白き杜若	全
追へば逃げ這ひ這ひ速し木の芽風	眞希子	苔の花比叡借景に庭の映ゆ	全
日永得て満員のバスやり過ごす	全	樟若葉ここから熊野神仏	全
握り返す握手の弾み卒業す	全	——「洛北五句」	
静まりて畝黒々と立つ雨水	弘子	茶に染まる木立の先にも芽吹き見ゆ	河原四郎
門前を過ぎて戻りて瞳る梅	全	潮枯れの杉の梢（うろ）にも芽吹きかな	全
咲き上る椿ひと群れ極相林	全	新緑や秘湯の女将見送りに	全
古草や岬に途切るる遊歩道	全	老鶯の声に目覚むる湯宿かな	允章
養生の身につれなきよ冴返る	恭延	新緑の真只中や不忘閣	全
彼岸桜廃車一輛朽ち果てて	和夫	田水張つて村が明るくなりけり	全
目には花粉山はうしやのう繁（しじ）余震	忠彦	三陸の鐵路はずた夏雲雀	紀久男
天からの文か白雪閨の日	全	夏巡るも復旧工事気配なし	全
友見舞ふ古墳の町に初音かな	紀久男	宮城野や線香あげて梨花桜花	全
表札なき小寺の葬や鉢の梅	全	四百年秘湯の宿に夏鶯かな	全
——「萬緑」6月号——		——南三陸町・仙台・青根温泉の旅	

二 東北被災地旅行のお薦め 三・一一より一年

「二時四十六分春の田で黙禱す」石橋みちこ（千葉）：「萬緑」六月号横澤放川選の次巻頭句です。被災地へ行かないで詩歌を詠むことに批判的な風潮があり、小生もいささか躊躇しておりました。

五月連休明け、飲み仲間年に一度の温泉旅行に宮城県の一部を見る機会を持ちました。

大阪水泳部の後輩（昭和50年入社）の小笠原君が仙台で介護施設と旅行会社を経営）が南三陸町と蔵王山麓の秘湯（青根温泉の湯元・不忘閣）を案内してくれました。マスコミ報道では分からない現地の復旧・復興がかなり把握できます。丸紅グループの被災地支援は広報誌「M—SPIRIT」に金銭・物資・ボランティア等多方面の活動を紹介しております。体力のあるOBの中には名古屋や関西から夜行バスでボランティア活動されたり、趣味の特技を活かしておられる先輩も居られます。体力も特技もない私共は地酒や食品を買ったり、旅行して消費するしかないようです。当会には青森出身（一灯さん、忠彦さん）仙台出身（青史さん、山内純二さん）そして仙台で幼馴染を失った芳博さんが居られます。現地での作品をお寄せ下さるようお願いしたいと存じます。以上

六月九日

紀久男記